



TITLE:

高昌回鶻と龜茲回鶻

AUTHOR(S):

藤枝, 晃

---

CITATION:

藤枝, 晃. 高昌回鶻と龜茲回鶻. 東洋史研究 1942, 7(2-3): 69-86

ISSUE DATE:

1942-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/138839>

RIGHT:

## 高昌回鶻と龜茲回鶻

藤 枝 晃

支那の史籍の傳へる所によると、回鶻の西域への移住が開始せられたのは唐の武宗の即位する前後のことであつて、次の宣宗の大中年間にはタリム河孟の北縁の地方にその政權が確立せられてゐた模様である。<sup>①</sup>こゝに出来た諸政權のうち、五代・北宋の頃に有力であつたのは高昌（新疆省トルファン）に據つてゐたものと龜茲（新疆省クチャ）に據つてゐたものである。前者は五代・宋の史籍にはまた「西州回鶻」とも呼ばれ、『遼史』には普通は「阿薩蘭回鶻」と見え、時には「和州回鶻」とも記される。その可汗は代々 Arslan Khan と號してゐたのであつて、「阿薩蘭」とはその音譯であり、また意譯して「師子王」と記される場合もある。

西域の地方がウイグル人によつて支配せられるやうになつたことは東洋史上の重大事件である。何となれば、彼等がトルキスタンを占據するやうになつて始めてトルキスタンの地が今日の如く「トルコ人の國」となつたからである。また、この地方を通ずる東西の交通が蒙古の大帝國の下に史上にその比を見ない大盛況を呈したのはそれより以前からウイグル人による西域地方の交通貿易の管理が確立せられてゐて、蒙古の支配の成る前に既にその素地は出来てゐたのによつても説かれる。<sup>②</sup>さういふわけであるから、彼等が如何にこの地方を支配し、如何

にこゝで交通貿易を營んでゐたかを知ることが頗る重要なことと言はねばならない。いま、その第一歩として、彼等の消息を傳へた支那史料に若干の検討を加へてみたい。

## 二

唐・五代の支那側の記録のうちにはこの方面の回鶻の消息に極めて乏しい。『宋史』に至つてはじめて彼等のために『高昌』・『龜茲』の兩傳がたてられた(卷四九〇)。ところが同じ卷のうちに、別に『回鶻傳』があり、これら三傳相互の間に多少の混亂がある。

その第一は高昌・龜茲の兩回鶻に關する記事が、それらの傳のほかは『回鶻傳』のうちにも含まれてゐることである。『續資治通鑑長編』卷五 咸平四年(一〇〇一)十一月の龜茲國の入貢の記事の註に、

按『國史』但有『回鶻傳』、無『龜茲傳』。『會要』云、「或稱西州回紇、或稱西州龜茲、又稱龜茲回紇。其實一也。……」。是年西州回鶻可汗王祿勝遣曹萬通來朝貢。事在四月。『國史』載之『回鶻傳』、而『會要』列於『龜茲卷』中、大抵一事也。

と言つてゐることから判斷すると、宋の『國史』には『龜茲傳』及び『高昌傳』がなく、『回鶻傳』だけがあつて、その内にすべての回鶻が扱はれてゐたものゝ様であり、之に對して『會要』は、後段に説く様に現在の徐輯本其他から推して回鶻(甘州回鶻其他)・高昌回鶻・龜茲回鶻の三者を區別して扱つてあつたものと思はれる。『宋史』の編者は『會要』によつて『高昌傳』と『龜茲傳』とをたてながら、『國史回鶻傳』によつてその『回鶻傳』を編んで、其のうちに含まれた西方の回鶻に關する記事を存したものに違ひない。

『文獻通考』<sup>卷三</sup>三六 四裔十三、西戎のうちの『車師前後王即高昌』・『龜茲』及び同卷三四二、四裔二十四、北狄のうちの『回紇』の諸條に、それ／＼前代の記事の後に宋代の記事が附加へられてゐる。『回紇』の條は徐輯本『會要』の『回鶻』次にいふ『宋史』の文を除いた部分を簡略にしたものであり、『高昌』・『龜茲』はそれ／＼『宋史』の傳に一致する（たゞ『高昌』の條のうちの王延徳の紀行がその末尾に置かれてある點が異つてゐるだけである）。従つて『文獻通考』は三條とも『會要』に依つたことが知られる。

斯様に『會要』の『回鶻』・『高昌』・『龜茲』の諸條は『宋史』の『高昌』・『龜茲』兩傳や『文獻通考』の三條の源流となつてゐるのであるが、現在の徐輯『宋會要稿』蕃夷四のうちのこれら諸條は正しく復原せられてはゐないから、こゝにその原形を一應考へておかねばならない。

先づ徐輯本の『回鶻』の條について言へば、これには『宋史回鶻傳』の記事の『會要』原本に見えないものが細字で以て補はれてあるが、恐らく徐松が修復した際にこのやうに手を加へたものであらうと思はれる。而して斯様に補はれてあるものをみると、その大部分が高昌・龜茲に關するものである。故に、この卷は元來は主として甘州回鶻を扱ふために設けられたものであることが知られ（宋代の史籍に單に回鶻と言へば甘州回鶻をさすのが普通である）、『會要』はもと／＼甘州・高昌・龜茲の三回鶻を區別して編輯せられてあつたことが判る。

次に徐輯本の『高昌』の條は、その初めを闕き、王延徳の紀行の最後の部分を以てはじまる數行を存してゐるのみであつて、<sup>⑧</sup>その原形を的確には知り難い。しかし、いま推斷した如く、『宋史』や『文獻通考』が『會要』に依つたものとすれば、その體裁はほゞ察することが出来る。

最後に『龜茲』の條は、『宋史』と比べると多少の出入があつて、『宋史』・『文獻通考』の據つた『會要』と徐

輯本の原本とは別の本ではなかつたかと思はれるのである。すなはち、『宋史龜茲傳』のうちには、「自天聖至景祐四年、入貢者五。最後賜以佛經一藏。」といふ句があり、更につゞけて熙寧四年、五年、紹聖三年の三次の入貢の記事があつて、文脈の上から途中に一つの段落が認められるが、徐輯本の方には斯る段落をつけねばならない様な書きぶりは認められない。これは恐らくは、前者が第一次編輯の『會要』、すなはち宋初より慶歴三年までを扱つた『慶歴國朝會要』によつて之を省略して右の如き段落ができ、更に續修の『會要』によつて其後の記事を追加へたものであらうと推測せられる。或ひはその續修の『會要』に慶歴以前のことが右の如く節略記載せられてゐて、『宋史』はそのまゝそれに依つたのであつたかも知れない。而して徐輯本のこの條は熙寧四年にとどまつてゐるから、その原本は恐らく『元豐增修五朝會要』<sup>⑤</sup>であらうと思はれる。

右の如く、西域の回鶻と河西の回鶻とをそれ／＼區別して扱つた『會要』と、これらをもつて扱つた『國史』との兩系の材料があつて『宋史』は兩者を併せ使用し、『文獻通考』は専ら前者によつたことが明らかとなつた。また、『會要』の原形も『宋史』其他との比較によつて、その輪廓はほど察しがつくと思ふ。それら相互の關係を表示すれば次の通りである。

會要	回鶻	高昌	龜茲
通考	回紇	車師前後王	龜茲
宋史	回鶻	高昌	龜茲
〔國史〕	回鶻	×	×

第二には、天山南路の高昌と龜茲との回鶻に關する『會要』の記事——ひいては『宋史』・『文獻通考』の記事——の間にも混亂がある。

すなはち、『會要』のこの兩條をみると、『高昌』の條は景德元年（一〇〇四）を以てうち切られ、『龜茲』の條は太平興國元年（九年の諱、九八四）よりはじまつてゐる。さらに仔細に吟味すると、『高昌』の條の末尾の

眞宗景德元年六月、西州回鶻遣使延金福<sup>延福</sup>○金、以良玉名馬方物來貢。

といふ記事に見える西州は後に説く如く安西州の略稱であつて、すなはち龜茲をさしてゐるものと解すべきである。同じ『會要』の蕃夷七之一五『歷代朝貢』の條に

景德元年五月十日、西州龜茲國回訖<sup>訖</sup>白萬進來貢。……六月十五日西州回鶻遣使金延福來貢。<sup>〔長編〕もは、同じ</sup>

とあるのは、右の『高昌』の條に記されたのと同じの朝貢を五月・六月の兩度に重ねて記したものであつて、高昌回鶻の入貢と見るべきではないと思ふ。

また、『龜茲』の條のその國の朝貢の記事の最初に見えた

太宗太平興國元年（實は九年）五月、西州龜茲易難與波斯門・波斯外道來貢。<sup>〔蕃夷〕四之二三</sup>

といふのは、『高昌』<sup>〔蕃夷〕四之二二</sup>の條に

〔太平興國〕九年五月、西州回鶻、與波斯門及波斯外道阿里煙朝貢。錫賚有差、館於禮賓院。西州進奉使易難、具道本國主稱號・服飾、習尚・風俗・城邑・道里、一如龜茲國。其波斯〔門〕僧、號永世、亦具道本國事。

とあるのと同じ事實を述べたものであつて、その文中には「一如龜茲國」といふ句のあることより見て、これは決して龜茲國の者ではなく、唐の西州即ち高昌國から來た者であることは明らかである。いま少しく穿鑿をすめると、この太平興國九年の朝貢は、その前に宋より高昌國に使ひした王延徳の歸來のことを述べて『宋史高昌傳』に

〔太平興國〕八年春、與其謝恩使凡百餘人、復循舊路而還。雍熙元年〔太平興國九年〕四月至至京師。

といふのと關係のあることであつて、五月にその入朝を記録せられた易難なる者こそ右の謝恩使なのであらう。

斯様に吟味して來ると、『宋會要』には高昌に關する記事は太平興國九年（九八四）を以て終り、龜茲に關する記事は咸平四年（一〇〇一）より始まるといふことが判つた。言ひかへれば、この方面の回鶻の宋と交渉してゐたものは、太平興國九年以前には高昌回鶻であり、咸平四年以後には龜茲回鶻であつたといふことになる。少くとも宋側ではさう呼んでゐたのである。『續資治通鑑長編』及び徐輯『宋會要』蕃夷七『歷代朝貢』に就いてこれをもて、次に説く如く龜茲が西州と呼ばれることを考慮に入れれば、全くその通り截然としてゐる。<sup>⑦</sup>

『宋會要』の『高昌』と『龜茲』との混雜は右の通りであるが、然らば何によつて斯る混雜を生じたかと言へば兩者がともに「西州」と呼ばれて居たからであると考へる。徐輯『宋會要稿』蕃夷四之一三、『龜茲』の條に「龜茲回鶻之別種也。（中略）或稱西州回鶻。或稱西州龜茲。又稱龜茲回鶻。其實一也。

と見える。卒爾に讀めばこの句は龜茲回鶻と西州即ち高昌回鶻とは同一の者と説いた如くである。高昌はすなはち唐の西州であつて、高昌回鶻が西州回鶻と稱せられる場合は事實しばゝあるけれども、こゝにいふ西州は決して高昌回鶻ではなく、唐代に安西都護府の治所であつた龜茲を指して呼んだ安西州の略稱である。何となれば

龜茲回鶻の宋への最初の入貢を記した『宋會要稿』蕃夷四之一三の記事に、龜茲の尅(克)韓王の完全な稱號と思はれるものが見えてゐるが、それには

大回鶻龜茲國安西州大都督府單于軍尅韓王

とあつて、これが『長編』卷四には「西川(州の譌)回鶻可汗王」と省略せられる。また同國の景德元年の朝貢は

『宋會要稿』蕃夷七之一五に「西州龜茲國回訖」と記され、蕃夷四之一二には「西州回鶻」と記されて『高昌』の條に收められてゐる。これらは何れも右の稱號の省略形であることは明らかであつて、高昌回鶻が西州回鶻とも呼ばれることから兩者を混同する場合が生じたものであることが容易に知られる。

ついでながら、『宋會要』にはなほ一ヶ所混亂のあることが認められるから、併せて説明しておかう。

徐輯『宋會要稿』蕃夷四之一三『龜茲』の項の冒頭に次の様な記事がある。

龜茲、回鶻之別種也。其國主自稱師子王。戴寶裝冠、著黃色衣。與宰相九人、同理國事。每出、其宰相著大食國錦綵之衣、騎馬前引、常以音樂相隨。其妃名阿厮迷。著紅羅縷金之衣、多用珠寶、嚴飾其身。每年一度出宮遊看。國城有市井。而無錢貨、但以花藥布、牙換博賣。米麥瓜果、與中國無異。西至大食國兩月程、東至夏州三月程。(『宋史龜茲傳』は之を節略す)

この記事の内容は、さきに引いた同書『高昌』の記事(五頁)に、「西州(高昌)進奉使の易難が本國の主の稱號と服飾、習尚風俗、城邑、道里を具さに語つた」といふのに正に符合するではないか。更にこれをこの時易難と共に入貢した天竺波羅門永世・波斯外道阿里煙の報告と比べられたい。

又有婆羅門僧永世。與波斯外道阿里煙同至京師。永世自言、本國名利得、國王姓牙羅五得、名阿睹你嚩。衣



黃衣、戴金冠、以七寶爲飾、出乘象、或肩輿、以音樂螺鈸前道、多游佛寺、博施貧乏。其妃曰摩訶你、衣紬縷金紅衣、歲一出、多所振施。人有冤抑、侯(俟ノ譌)王及妃出游、即迎隨申訴。署國相四人、庶務並委裁製(制ノ譌)。五穀六畜果實、與中國無異。市易用銅錢、有文漫圓、徑如中國之制、但實其中心、不穿貫耳。其國東行經六月至大食國、又二(一作三)月至西州、又二月至夏州。

阿里煙自云、本國王號黑衣、姓張、名哩里沒。用錦綵爲衣。每游獵三二日一還。國署大臣九人治國事。男子

以白疊布爲衣、婦人豪富者、著大食國錦綺、貧下止服絹布。種陸田而無稻糯、土宜絲蠶羊馬果實。無錢貨、

以雜物貨易。『實錄』云、東至婆羅門六月程、又東至大食國六月程、〔恐有脫文〕又東至夏州二月程。

永世・阿里煙、太平興國九年與西州回鶻同來。

(徐輯『宋會要』蕃夷四之八九一九〇『天竺』)

⑤

この天竺と波斯との國情を述べた文章はさきのもとと全く軌を一にしてゐることに氣づかれるであらう。すなはち、同時に入貢した三國(若しくはそれ以上)の朝貢使に對して宋側が一定の項目について質問を試み、その報告を記録したものと考へて間違ひない。而して右の『龜茲』の條の序文が實は高昌の事情を述べたものであることは、冒頭に「其國主自稱師子王」とあることによつて明らかである。易難の報告のうちには「一如龜茲國」といふ句があつて、龜茲國の狀態が既に知られてゐることを前提としてゐる。故に、高昌・天竺・波斯三國のほかに龜茲國の使節もそこに居て、同様の報告を行つたといふ場合も考へられないことはない。けれども「師子王」といふ稱號は高昌國の可汗が代々承襲してゐたのであつて、宋側の諸史籍の一々の朝貢の記事に徴しても、龜茲の可汗は支那と交通する時には普通尅韓王と號してゐて、師子王とは稱してゐなかつた様である。従つて右の『龜茲』の條に見えた記事は、高昌國の使者の報告を、「一に龜茲國の如し」といふことから、『會要』の編者がその

まゝ探つて『龜茲』の序文とし、而してその際に師子王なる高昌可汗の稱號もそのまゝ採録したものと察せられる。

#### 四

『宋會要』の混雜は右の通りであつて、これを辨析すると太平興國九年（九八四）以前の者が高昌回鶻であり、咸平四年（一〇〇一）以後の者が龜茲回鶻であることが判つたが、これは如何なる事情に基づくのであるかを次に考へてみたい。遺憾ながら、このことを直接に語る史料はないので、諸般の事情より推測するより外に方法がないが、これについては大體次の様な場合が考へられるかと思ふ。

（一） 宋側に於ける名稱の變更。

（二） 高昌回鶻の龜茲への移轉。

（三） 高昌國の滅亡。

第一の場合について考へると、後段に説く様に、高昌回鶻の場合には常に今日の寧夏省の沙漠を横斷する道を通つて來て居り、龜茲回鶻は今日の甘肅省のオアシス地帶を通つて來てゐたのであつて、恰かも南北朝時代に九姓昭武諸國が南朝と北朝とで異なつた呼び方をせられてゐた如く、支那にはいる經路が異なるために其の呼名が變つたといふことも一應は考へられる。しかしながら、アルスラン汗の高昌回鶻は王延德が親しくこゝに赴いてその記録を残してゐるから、明らかに高昌に據つてゐたものである。また、龜茲回鶻は、そこに行つて來た者こそないけれども、右に引用した「大回鶻龜茲國安西州大都督府單于軍克韓王」なる稱號は高昌とは何の關係もな

く、龜茲以外の者ではあり得ないから、この想定は成り立たない。

第二の移轉説は前の場合よりは合理的である。しかし高昌回鶻が龜茲にその本據を移したことは史籍に明證のあることではなく、却つて高昌の可汗は右に述べたやうに代々アルスラン・ハーン（師子王）と號してゐたのであり、龜茲の可汗はその稱號を用ゐてゐないのであるから、別の系統の者と認める方が妥當である。

從來は『宋史』の記事をそのまゝにうけ入れ、また「西州」の意味に氣づかず、右の様な場合を想像した者もあつた。<sup>⑩</sup>しかし高昌と龜茲とは明らかに並び存してゐた二國であつて、同じ者が異なつた名で呼ばれたり、或はその根據を移したものと認むべきではない。何となれば、東方の史籍には右の様に高昌回鶻の名が見えなくなつて後にはじめて龜茲回鶻があらはれて來たのであるけれども、西方の史籍には、反對に、この頃は高昌回鶻のことは何も傳へられてゐないが、龜茲の回鶻は早くより知られてゐたのである。すなはち、マズーディの『金の牧場』のうちに次の様な記事が見える。

タガズガス Tagazgaz（＝回鶻）はホラサーンと支那との間に位置するクーンシャーン Kouchan といふ町に據つて居り、今日すなはち三三二年（西紀九四三―四四年）に於いてはすべてのトルコ族中で最も勇敢であり、最も有力であり、また最もよく治まつてゐるものである。その王はイル・ハーンといふ稱號をもち、これらすべての種族のうちで彼等のみがマニ教を奉じてゐる。（第十五章）<sup>⑪</sup>

……次にクーンシャーンの町を領しタガズガスを統べるトルコ種の王が數へられる。人々は王に猛獸の王、馬の王なる稱號を與へたが、それはこの世の如何なる王侯もこれ以上に勇敢な兵隊を部下にもつては居らず、またこの王より澤山の馬をもたないからである。その國は支那とホラサーンの沙漠との間に孤立して居る。王

みづからはイルハーンといふ稱號をとなへてゐて、トルコ族中には一人の王の下に従はぬ數々の君侯や多くの民があるとはいへ、誰もこの王には敢て抗らふ者はない。(第十六章)<sup>⑩</sup>

このクーシャーンとは蒙古時代に曲先と呼ばれてゐた町で、即ち龜茲をさすものであることは羽田博士がかつて論證せられた通りである。<sup>⑪</sup>

かやうに、高昌回鶻が支那と交通してゐたときに既に龜茲には回鶻の有力な政權がたてられてゐたのである。

さきに引いた太平興國九年(九八四)の高昌の使節易難の報告の中にも、高昌國の狀況を述べ右後に「一に龜茲國の如し」と附加してゐるのは、この二つの政權が天山の南麓に並び存してゐたことを語るものでなければならぬ。あるひは一方が他方に依存するといふやうな關係にあつて、兩者が全く對等ではなかつたといふ狀態も考へられないではないけれども、こゝに二つの國があつたことには間違ひない。この二つの國が互の障壁となつて、東方には東側に位置する高昌だけが知られ、西方には西側に位置する龜茲だけが知られて、右の様に東西の史籍にはそれ〴〵一方だけが記録せられてゐたものと察せられる。別の言ひ方をして、高昌と龜茲とが、支那とイスラーム世界とのそれ〴〵の地理的知識の限界、ないしは通商圏の限界であつたとも言ひ得るかも知れない。

然らば、太平興國九年(九八四)まで高昌回鶻が支那と交通してゐて、咸平四年(一〇〇一)以後になると龜茲回鶻のみが支那と交通する様になつたことは、第三の場合の、高昌の政權の滅亡によつて、今までその蔭にあつて知られてゐなかつた向ふ側の者と交通する様になつたと解する以外に解釋はない。而して、高昌を滅亡せしめた者は、龜茲回鶻以外の者ではないと思ふ。後に支那の西北で強大な勢力となつた西夏も、龜茲の支那との交渉がはじまつた頃はやつと靈州まで進んで來てゐたに過ぎなかつたものであり、その外にも高昌までを併し得る程の

大きな勢力はこの邊りには認められない。龜茲回鶻より初めて宋に派遣せられた使者の言葉に、その國の東境は黃河にまで及んでゐると述べてゐるのは、その談話には多少の誇張があるにせよ、龜茲が高昌までその勢力を伸ばしてゐたものと受けとらねばならない。この後龜茲は盛に支那と往來するが、それには必ず高昌を通過するのであつて、若し高昌が他の勢力の支配下にあれば、それが東方に知られずに居るといふことはないであらう。

右の様な次第で、高昌のアルスラン・ハーン朝は龜茲のために併合せられたと認められるのである。而してその時期は、太平興國九年(九八四)以後高昌の名が宋側の諸史籍に見えなくなつた後も、『遼史』には統和十年(九六六)まで殆んど毎年と言つてよいほど引きつゞいて阿薩蘭回鶻の入貢の記事が見えるから、咸平四年(一〇〇一)に龜茲が初めて宋に朝貢したのは高昌を併合してより間もない時であつたと思はれる。

その後の高昌の状況は明らかでない。數十年たつと『遼史』にはまた阿薩蘭回鶻・高昌回鶻の名が現はれ(後段参照)、また『金史』にも和州回鶻の名が見える。蒙古が興起したときは、こゝは代々イディクトなる稱號を有する君主に治められてゐて——高昌の故址は今日イディクト・シェーリ(イディクトの城)と呼ばれてゐる——この高昌王は西遼が興起した時に之に降り、その支配下にあつてこゝを治めてゐたが、蒙古が興つたときに直ちに之に應じてその西遼征服を助けたといふことが東西の史料に傳へられてゐる。<sup>①</sup>これがアルスラン・ハーンの後裔なのか、或ひは龜茲より派遣せられた代官でもあるのか、それとも全く別の者なのか、全然知ることが出來ない。

なほ、注意すべきことはこの太平興國九年（九八四）より咸平四年（一〇〇一）の前後は東西交通路に沿つた諸地方にいろ／＼重大な事件のあつた時であつて、高昌の滅亡もその内の一つなのである。先づ東方では、右にも述べた通り西夏が興起して、今日の寧夏省・甘肅省をそれ／＼横斷する道を通つて行はれる東西の交通貿易に強力な制壓を加へるやうになつた。この方面、とくに寧夏省を横斷する道は高昌の東方への通商路にあたつてゐて、高昌がこれによつて被むつた影響は蓋し甚大であつたと思はれる。龜茲がはじめて宋に入貢した時にも、その使者の曹萬通なる者が次の様に西夏に對する共同出兵を提議してゐる。

〔曹〕萬通自言、任本國樞密使。本國東至黃河、西至雪山。有小郡數百、甲馬甚精習。願朝廷命使統領、使得縛纒遷惡黨、以獻。（『宋會要』蕃夷四之  
一三、『長編』四八）

宋側では西夏の壓迫に對抗するために、咸平元年に眞宗が即位すると秦州を経て涼州に到る道を新たにひらいて以て西方諸國との通商關係の維持をはかつたのであつて、龜茲もその道から宋に入貢してゐたのである。この宋側の處置に對應して河西地方のオアシス諸國——それまでは党項・阻卜等の仲介によつて遼と交通してゐたと考へられる——の間に西夏に對する共同戰線が張られ、宋に對して右の様な提言をしたのも龜茲ばかりではなかつたのである。<sup>⑮</sup>

また、これはさほど大事件ではないが、當時高昌より東南にあたる沙州に漢人の立てゝゐた小王國である歸義軍節度使でも、五代の初め頃から續いてゐたその主權者の曹氏の一族の間に内紛があつて、同じ曹氏ではあるが別の系統の者が立つことゝなつた。<sup>⑯</sup>

西方より西南方にかけては劃期的な事件が進行してゐた。すなはち、イスラーム教を奉ずる回鶻のカラ・ハー

ン朝（イレク・ハーン朝）がベラサグンよりカシユガルに進出して来て、更に南道第一の要衝である于闐に戦を挑んでゐた。于闐は佛教を奉じ李姓を名のる者（これもあるひは回鶻であつたかと思はれるが）が王となつてゐて兩者の間に二十四年間（一説には十四年）に及ぶ激戦が繰返された揚句に佛教徒の李氏于闐はイスラーム教徒のカラ・ハーン朝のユスフ・カドル・ハーンの滅ぼす所となつた。その時期は詳しくは判らないが、高昌の滅びたよりは少し早い頃であつたと思はれる。斯くして、大中祥符二年（一〇〇九）になるとカラ・ハーン朝より宋への第一回の使節が派遣せられた。<sup>⑪</sup>

今までに紹介せられてゐる普通のイスラム史料には、不思議にもこの東トルキスタンの南道を征服した回鶻の消息を傳へながら、北道を支配してゐた龜茲の政權のこれとの交渉を語つてゐない。想像を逞しくすれば、このカラ・ハーン朝が南道を征服すると共に北道の龜茲・高昌をも席捲したもので、問題の龜茲が高昌を併合したといふ事件はその一聯の事件の東方の尖端であつたといふ風にも考へられなくはない。しかし、この方面にイスラム教がはいつて來たのが極めて遅れてゐたといふ事情を考慮すると、カラ・ハーン朝の勢力は北道には及んでゐなかつたものと思はねばならない。とにかく、東トルキスタンの西南には斯様な勢力が形成せられて居たのであるから、龜茲のそれとの對立乃至はそれによる刺激といふことが當然考へられ、龜茲の高昌併合の事情も恐らく此の間の情勢を知ることによつて明らかにせられるのではあるまいか。

## 六

ほかに龜茲回鶻と高昌回鶻とについて認められる顯著なことを一二申し添へておきたい。

高昌回鶻の支那への朝貢は今日の寧夏省を横斷する道、すなはち當時九族達紐の據つてゐた地方を通つて行はれるのが普通であつた模様である。太平興國六年(九八一)に宋より高昌に派遣せられた王延德がその紀行を書きのこしてゐるが、それで見ると夏州(綏遠省)より出發して、その道を往復して居る。同八年に宋に來た使節に關しても次の様な記事が『長編』<sup>卷二</sup>に見えてゐる。

是歲、塔坦(達紐)國遣使唐特墨、與高昌國使安骨盧俱入貢。骨盧復道夏州以還。特墨請道靈州、且云、其國王欲觀山川迂直、擇便路入貢。詔許之。

遼には勿論この道を通つて入貢してゐたもので、党項がその嚮導をつとめて、宋の北邊を東に進んだものと思はれる。『遼史屬國表』に阿薩蘭回鶻の入貢と並んで党項・阻卜の入貢の記事が見える場合の多いことはその間の事情を示してゐるものと解してよいであらう。

之に對して龜茲回鶻は常に河西地方、すなはち今日の甘肅省のオアシス地帯を経由する道を通つてゐた。前にも觸れた如く、龜茲のはじめて宋に朝貢したときは、西夏の妨害によつて從來の街道が通れなくなつて、宋では西涼府(甘肅武威縣)の吐蕃六谷部を懷柔して西方諸國の誘引を策し、それに應じて宋に入貢したものである。その後の宋への朝貢の記事を見ると、常に沙州・甘州など河西の國々の朝貢使と同道してゐるから、この道を通つてゐたものであることは疑ない。

もつとも、敦煌文書の今日發表せられてゐるものゝうちに西州に關した文書が數通あることから見て、高昌回鶻によつてもこの道を通る私貿易は營まれてゐたのであらう。<sup>18)</sup>

次に、高昌回鶻は遼への入貢が頻繁であり、宋への入貢が稀であつたのに對し、龜茲回鶻は宋への入貢が多く



遼への入貢は稀である。すなはち、『遼史』本紀及び屬國表には、高昌即ち阿薩蘭或は和州回鶻の朝貢が國初より統和十四年(九九六)までの間に十三次記録せられてゐる。ほかに王延徳の紀行のうちにも高昌で遼の使者に出會つた話をのせてゐる。之に對して中原に對しては、五代には只一度周の廣順元年(九五二)に西州回鶻朝貢の記事が見えるだけであり、宋の諸史籍には數次見えてゐるが、仔細に見ると、太平興國六年にアルスラン汗の朝貢が行はれ、之に對して宋側より王延徳以下の使節が派遣せられ、その答禮使の朝貢が同八年・九年の兩次に宋に到つたといふ一聯の交渉以外には、それより前に建隆三年(九六二)の阿都督の朝貢と乾徳三年(九六五)の僧法淵の朝貢とが記録せられてゐるだけであつて、しかもこれらは正式の朝貢ではなかつたらしく、右の太平興國六年の朝貢を記して『長編』<sup>卷二</sup>には左の通り記されてゐる。

高昌國王阿斯蘭漢、始自稱西州外生(甥)師子王、遣都督邁遜、來貢方物。

龜茲回鶻は、宋との交渉は景祐年間まで十二次の朝貢が記録せられてゐるのに對して、『遼史』には統和二十三年(一〇〇五)に一次見える以外、重熙十四年(一〇四五)以後になつて數次見えるのみである。統和廿三年以後のものも依然阿薩蘭回鶻・高昌回鶻と呼ばれてゐる。龜茲回鶻を舊に従つてさう呼んだが、龜茲の支配下にある高昌の主權者より派遣せられたものであらう。

なほ右の統和二十三年の朝貢は『遼史本紀』<sup>卷一</sup>に

阿薩蘭回鶻遣使來、請還先留使者。盡還之。

と記されてゐて、言ふ所は穩かでない。この年は龜茲の高昌を併せてより間もない時であるから、右の記事は恐らくそれに何か關はりのあるものと察せられる。しかし『遼史』の本紀と屬國表のその前後の記事よりその間の

事情を説明するに足るものを發見し得なかつた。博雅の士の示教にまちたい。

註① 拙稿『九州歸義軍節度使始末』(二)上編三、『歸義軍をめぐる諸外族の勢力』(東方學報、京都第十二冊四分)五〇三―八頁。

② 宮崎市定助教が昭和十四年度京都大學東洋史特殊講義に於てかやうに説かれたと、その頃に佐伯學士より教示せられたのであるが、また聞きであるから或ひは私の表現法は違つてゐるかも知れない。

③ 『高昌』の條の末尾には「餘詳前傳『回鶻』」と註記がある。恐らく修復の際に加へられた註であつて、もちろん原本には無かつたものであらうし、また『永樂大典』にあつたものでもないと思ふ。而して謂ふところは、『回鶻』の條に詳しい記事があるから、こゝには『大典』よりの抄出を省略した」といふ意味ではなく、「この條は簡略であるけれども、詳しいことは前傳に見えてゐる」といふつもりであつて、前半の闕けたのは編輯者の手落ちによるものと解せられる。

④ 『會要』の諸本については湯中氏『宋會要研究』卷一、『宋會要考略』三―一六頁を参照せられたい。

⑤ 『六朝國朝會要』三百卷。晁氏曰、神宗朝、以會要止於慶歷、命王珪續之。起於建隆之元、迄熙寧十年、通舊書增損成是書。(文獻通考卷二百一、經籍二十八)

⑥ この太平興國元年といふのは、太平興國九年即雍熙元年を混同したものであつて、九年五月が正しいことは、その記事をも、本文に引いた『宋會要稿』の『高昌』の記事、同じく蕃夷七之一のの記事及び『長編』太平興國九年五月の條と比べれば明らかである。

⑦ 徐輯本『宋會要』蕃夷七『歷代朝貢』は『玉海』『山堂考索』などの記事を註記してゐるが、それらには右の註⑥に言つた様な類の誤りがあることに注意せねばならない。

⑧ 『宋史天竺傳』及び『太宗皇帝實錄』(『古學彙刊』第一集史部所收)にも此の記事があり、少々異同がある。後者の記事が最も詳しいが、誤脱が二三あるから、こゝには『會要』をひいて、諸本との異同を附記しておいた。引用文の終より二行目の( )内の文はこの『實錄』によつて補つたのであるが、大食國と夏州との間に「又東至西州二月程」といふ一句が元來あつたものと考へねばならない。

⑨ たゞ一つ例外として、龜茲國の天禧四年(一〇二〇)の入貢を記した『宋會要』蕃夷四之一五には

四年十二月、可汗師子王智海遣使來朝貢大尾白羊。

あると思ふ。

- ⑩ 従来發表せられたものの中では、例へば王日蔚氏の『唐後回鶻考』(史學集刊第一期四三—四四頁)の如きは第一の場合と考へて、事情にうとい宋側で同一の者を或は高昌と呼び或は龜茲と呼んでゐたといふのである。またブレットシュナイダーの如きは第二の場合と考へて、高昌の回鶻が本部を龜茲に移したといふ (E. Bretschneider, *Medieval Research* s. Vol. I, p. 245.)。

この兩説はともに『宋史高昌傳』の冒頭の數行の記事のうち「龜茲の王は師于王と號する。……龜茲回鶻は西州龜茲とも呼ばれる」といふことがその根據になつてゐるのであるが、『宋史』のその記事はさきに引用した『會要』に基づいてゐるのであつて、私が辨析した如く、『會要』・『宋史』の『龜茲傳』の序文は高昌の使節易難の報告をそのまゝとつたものであり、また龜茲を西州と呼ぶことは、唐の西州(即ち高昌)の意味でなく安西州(即ち龜茲)の略稱である。従つて兩説はともにいはれのなりことと言はねばならなう。

- ⑪ C. Barbier de Meynard et Pavet de Courteille, *Les plaines d'or*, Paris, 1861, T. I, p. 238.
- ⑫ *ibid.* p. 365.
- ⑬ 羽田亨博士『吐魯番出土回鶻文摩尼教徒祈願文斷簡』(桑原博士還曆記念東洋史論叢)一三五七—九頁、「大月氏と貴霜に就いて」(史學雜誌四十七編九號)一七一—二七頁
- ⑭ 虞集『高昌王世勳碑』(『道園學古錄』卷二四)。「元史」卷一二七巴而朮阿而忒的斤傳。
- ⑮ *Aiai ud-Din, Tarikh Dihan Kushai*. (邦譯ターニン蒙古史岩波文庫本上卷三二二頁以下所引) 其の他。
- ⑯ 前掲拙稿(三)下篇「二、五代・宋初の東西交通路」(東方學報京都第十三冊一分) 參照。
- ⑰ 同上、下篇「一、『曹氏』の世系」(東方學報京都第十三冊一分) 六八—九頁
- ⑱ M. Grenard, *Le légend de Salok Boghla Khan*. (*JdA.* 9—XV, 1900)
- ⑳ 前掲拙稿(四)下篇「四、『歸義軍』と交通路上の諸國との關係」(東方學報京都第十三冊二分)